

「第一回宣教旅行が終わる」

2016年06月21日

使徒言行録 14章 21節～28節。二人はこの町で福音を告げ知らせ、多くの人を弟子にしてから、リストラ、イコニオン、アンティオキアへと引き返しなから、弟子たちを力づけ、「わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない」と言って、信仰に踏みとどまるように励ました。また、弟子たちのため教会ごとに長老たちを任命し、断食して祈り、彼らをその信ずる主に任せた。それから、二人はピシディア州を通り、パンフィリア州に至り、ペルゲで御言葉を語った後、アタリアに下り、そこからアンティオキアへ向かって船出した。そこは、二人が今成し遂げた働きのために神の恵みにゆだねられて送り出された所である。到着するとすぐ教会の人々を集めて、神が自分たちと共にいて行われたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったことを報告した。そして、しばらくの間、弟子たちと共に過ごした。

パウロとバルナバはリストラを追われ、デルベに向かった。この町で福音を語り、多くの人々を弟子にした。即ち、教会が成立したということである。それから、来た道を引き返しなから、リストラ、イコニオン、アンティオキアを訪ねた。どの町でも、ユダヤ教徒から迫害を受けたので、秘密裡に集会を開き、弟子たちを励まし、力づけたのであろう。二人は「わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない」と語り、苦難を受けながらも、信仰に固く踏み留まるように勧めた。パウロは、フィリピ書 1章 29節で「つまり、あなたがたには、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです」と語り、また、3章 10節、11節では「わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです」と書いている。パウロは主イエスの十字架の苦しみと同じ苦しみに与ることが恵みで、復活の命に達する救いがあると信じた。主イエスは十字架の苦しみを受け、復活の輝かしい命に与ったように、あなた方も苦しみを経て、神の国に入りなさいと勧めた。苦難の道を通して、はじめて福音を自分への祝福として受け取れるからである。そして、教会ごとに長老を任命し、断食して祈り、教会を主イエスに委ねた。教会は組織を徐々に組み立てていったと伝えている。

二人はピシディア州を通り、パンフィリア州のペルゲに来て、御言葉を語った。アタリアの港に着き、そこからアンティオキアへ向かって船出した。アンティオキア教会は二人の働きのために祈り、神の恵みに委ねて送り出したベース教会である。到着するとすぐ教会の人々を集めて、神が自分たちと共にいて行われた全てのことを報告した。宣教の主体はあくまで、主イエスであった。喜びに包まれた報告会であっただろう。報告会で注目されたことは異邦人が福音を受け入れ、信仰の道が開かれたことであった。波乱万丈の第一回宣教旅行が終わった。

二人は、まずユダヤ人を対象にし、ユダヤ人の会堂で説教し、宣教を始めた。しかし、彼らは心を閉ざし、ユダヤ教の信仰、伝統に留まり続けた。ところが、ユダヤ教に改宗していた異邦人たちが信仰に入った。このことは、二人にとって思わぬ収穫であり、喜びであった。ユダヤ教イエス派が新しい展望を見る契機になっていく予兆を見たのである。殊に、パウロにとって、異邦人が信仰に入ったことは、これからの宣教に対し、大きな希望が与えられ、新たな決意をもたらしたことは確かである。